

浜の活性化は俺たちから
－新規漁業の起業を目指して－

ひやま漁業協同組合江差潜水部会
部会長 田中 利明

1 地域の概要

私達の住む江差町は、北海道南西部、渡島半島の日本海側に位置する人口約1万人の町である。気候は1年を通して比較的温暖であるが、冬はたば風と呼ばれる北西の季節風が強いことが特徴である（図1）。江差町は北海道文化発祥の地といわれ、江戸期にはニシン漁で繁栄した。また、様々なイベントや祭りが開催され、観光で訪れる人は年間50万人を超える観光と漁業の町である。

2 漁業の概要

ひやま漁協江差支所は、組合員が118名で、平成15年の水揚げは約4,791トン、12億1千万円であった（図2）。このうち回遊性魚類であるスルメイカとスケトウダラが漁獲量の約80%を占める漁船漁業が中心である。この他には小定置、1本釣り、その他延縄、アワビ・ウニ類等の磯廻り漁業などがあり、1年を通して漁業を営んでいる。年齢構成は60歳以上が60%以上と高齢化が急速に進んでいる（図3）。

3 研究グループの組織及び運営

私達潜水部会は、青年部時代の平成13年から潜水技術を活かした活動を始め、平成14年に今後の磯廻り漁業の発展を目指すことを目的に青年部潜水部会として9名からなる組織を設立した。その後、平成16年に江差潜水部会として独立し、現在部員は11名で構成されている。主な活動は、かもめ島周辺の海底清掃作業、漁船メンテナンスとキタムラサキウニ深淺移殖作業、磯廻り資源の調査及び資源管理型マナコ潜水器漁業操業モデル化試験等に取り組んでいる。運営は漁船メンテナンス、キタムラサキウニ深淺移殖や平成16年からマナコ試験操業の収入と会費で賄っている。

4 研究・実践活動課題選定の動機

青年部活動をしていた平成12年頃の部員数は18名いたが、操業形態の違いで集まれる時間が一致しない等の理由により、団結して何かをやり遂げることが難しくなっていた。

浜の現状をみると、その年の漁海況に左右される回遊性資源に大きく依存していること、高齢化と組合員数の減少で活力が無くなってきた。この問題については、我々漁師一人一人が真剣に考え、このままではいけないと考えるようになった。このような状況の中で、いずれ潜水技術は役に立つと感じていたので、平成10年から関係機関の協力を得て、毎年潜水技術研修を行い、潜水士資格の取得に励み、技術の向上を図ってきた。そこで、まず潜水技術を活かして磯廻り資源

を中心とした漁業生産活動の役に立ち浜を活性化させ、将来的には「潜水技術を活かした新しい漁業を立ち上げよう」と新たな活動を始めた。この活動には、ひやま漁業協同組合、北海道栽培漁業振興公社、江差町役場、檜山支庁水産課、指導所の支援を受けて活動を行った。

5 研究・実践活動状況及び成果

(1)潜水研修及び地域活動への取り組み

潜水士免許の取得に励んだ結果、現在では7名が潜水士免許を取得している。平成12年から漁業研修所の支援で実技講習を受け、緊急時の対処法等を学び、技術が向上してきた(写真1,2)。そこで、手始めに一般漁業者の漁船メンテナンス作業から始めた。平成13年には、北海道大学水産学部アクアリング部(以下北大生)からの誘いがあり、海底清掃を共同で行うことになった。北大生はレジャーダイバーの不信感を減らすために行動で示したいということであった。海底清掃は漁場保全活動の一環として継続して実施し、新聞にも掲載されるようになった(写真3,4 図4)。また、私達のその他の活動にも北大生の協力が得られるようになった(写真5 図5)。

(2)潜水技術を活かした漁業生産活動への取り組み

①前浜資源調査

本町沿岸は、アワビ・ウニ類等の磯廻り漁業が盛んであったが、生産量は増減を繰り返し安定していない(図6)。

そのため、資源の添加及び再生産を目的として、国や道の支援を受け、エゾアワビとエゾバフンウニ人工種苗放流等の積極的な増殖事業を行ってきた。しかし、現段階では水揚げ量の増加や資源増大に結び付く明確な結果が得られていない。

磯廻り資源の現状を把握する資料を得るためには潜水調査が必要であった。そこで平成13年に資源実態を把握するための予備調査を磯廻り団体と共同で行った。その結果、青年部もやるものだという評価を組合と磯廻り団体から受けることが出来た。

今後の方針を決めるため、磯廻り団体の役員会に参加し、調査計画案を検討した結果、平成14年から5カ年計画で前浜資源調査を行うことになった。調査の方法は、潜水によるライン調査で採取した生物の大きさ、重量等を記録した(写真6,7)。

この調査から資源の現状、特徴等を数字で資料として残し、これに磯廻り団体員の経験と知恵を加えて、漁場を管理する方法、資源を増やす方法や上手に獲る方法について関係機関を入れて検討し、実行することにより、前浜資源で末永く漁業を営めるようにしようということになった。また、その年々の調査や操業状況から対策を取れるものは関係機関と協議し、解決していくことにもなった(写真8)。

②キタムラサキウニ深浅移殖

前浜資源調査で水深8m以深には、未利用となっているキタムラサキウニが多数確認された(写真9)。今までキタムラサキウニは、他の地区から種苗を

購入して放流してきた。そこで、資源の有効活用について磯廻り団体と検討した結果、平成 14 年から私達が潜水による移殖を請け負うことになり、収入を得られるようになった（写真 10）。

③アワビ潜水放流

平成 13 年、14 年の前浜資源調査で、アワビの生息密度が低い地区があった。また、ヒトデ類やヒメエゾボラ等の害敵も多く確認でき、これらに食べられている状況も潜水観察することができた。そこで、平成 15 年の役員会で、これまでの調査結果や食害状況等を知ってもらい、その対策として地区を選定し、放流技術改善試験を行った。その内容は、潜水とツブ籠による害敵駆除、ホタテ殻に種苗を付着させ潜水で放流する方法である（写真 11, 12）。これらの状況をビデオや写真に記録して、磯廻り団体役員に報告した結果、平成 16 年はホタテ殻付着放流数を増やし、放流前の害敵駆除を団体員が数日かけて実施した。

(3) ナマコ資源管理型漁業への取り組み

これまでの調査やキタムラサキウニ深浅移殖作業から水深 10m 以深に現在は未利用となっているマナマコが多数確認された。江差のナマコ漁は過去に、沖合で桁曳きによる漁獲を行っていたが、魚が付く根が壊れることも理由に平成 10 年から休漁していた（図 7）。そこで組合や磯廻り団体へ未利用資源の有効利用を提案し協議した結果、これまでの活動が組合に認められたこともあり、平成 16 年からタモで採る場所よりも深い水深 12m～20m で既存漁業との棲み分けを行い、試験操業として 3 トンの漁獲枠を貰うことが出来た。私達は単なる試験操業だけでなく、新たな潜水器漁業として立ち上げるために、資源量調査を兼ねた操業にしたいと関係機関に相談し協力を要請した。その結果、資源管理型マナマコ潜水器漁業操業モデル化試験に 3 年計画で取り組み、これらから得られた資料を基に、持続可能な漁獲許容量等を関係機関と共に検討することになった。

調査では、操業場所となる漁場に区画を設定し、部会員がライン調査を行って、採取した個数、重量を記録した（図 8, 9 写真 13, 14）また、調査区以外にも漁場開拓として試験操業を行い、場所、人数、時間、漁獲量を部員が記録した。

この取り組みは、ひやま漁協管内の「浜の改革推進事業」の展開方向に組み込まれた。

6 波及効果

磯廻り団体との連携を通して、浜のリーダーの他に私たちの考えに理解を示してくれる漁師が増えてきた。また、現在では磯廻り団体に役員として私たち部員から 3 名が入るようになったことから、会議等での意見が反映されるようになり、部員の意識も向上し、団結力が強くなった。

各種潜水作業やナマコ試験操業で収入も得られるようになり、これからは自己資金で部会を運営していこうという自立心も生まれた。また、漁師間の協力体制や役割分担、北大生との交流等で浜は活性化したと実感している。

7 今後の課題や計画と問題点

前浜資源調査やナマコ操業モデル化試験は、後2年の継続課題である。これらを計画的に実施し、得られた資料を基に、関係機関と資源管理型漁業の確立に向けて検討し、浜の活性化や新規漁業の起業を目指していく。

私達の収入となっているナマコを手始めに、販売方法等を工夫し、収入を増やしていきたいと考えている。また、これまでは主に地域内での活動であったが、私達の活動を推進していくためには、地域間の連携や他地区の状況はもちろんのこと消費者ニーズも知ることが重要であると考えようになった。よって情報の入手はもとより、目的を持って研修活動等も始めたいと考えている。

このままでは、漁業者の数も極端に少なくなり漁獲量も減少する時代が来ると思われ、漁業や地域が衰退してしまうのではないかと不安がある。しかし、私たちの活動を通じて漁業を発展させることは、地域も発展し活性化につながると思っている。

今後は、意欲のある後継者を増やしていくためにも、浜と地域が団結して魅力のある漁業を行えるように活動を続けていきたいと考えている。

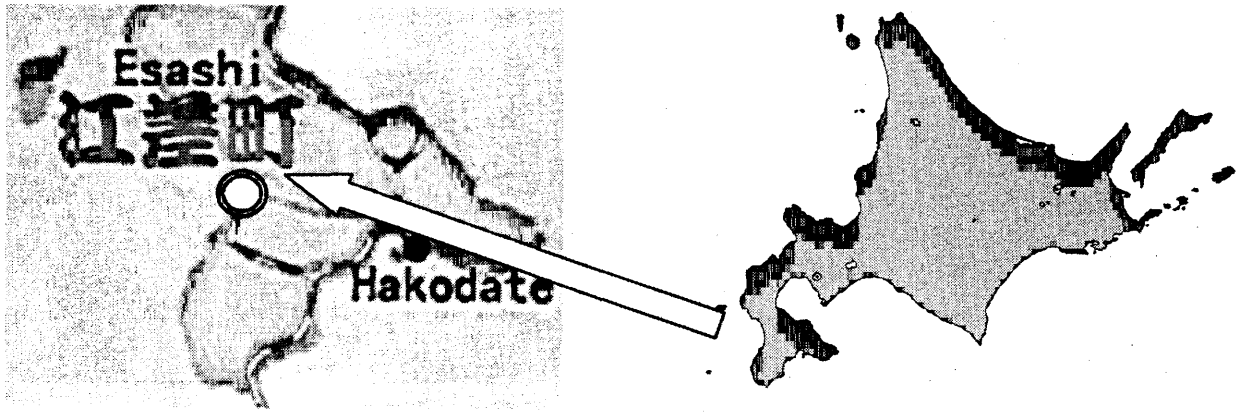


図1 地域の位置図

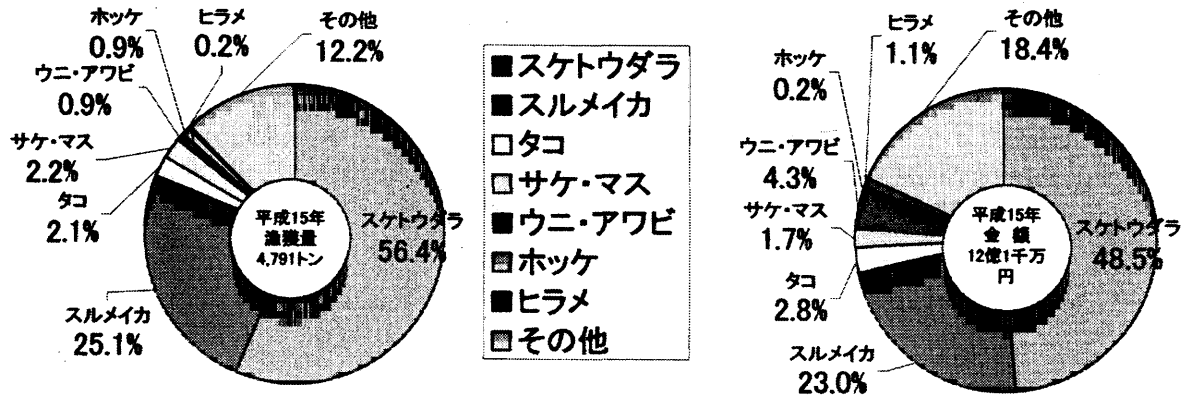


図2 平成15年 ひやま漁協江差支所 漁業生産状況

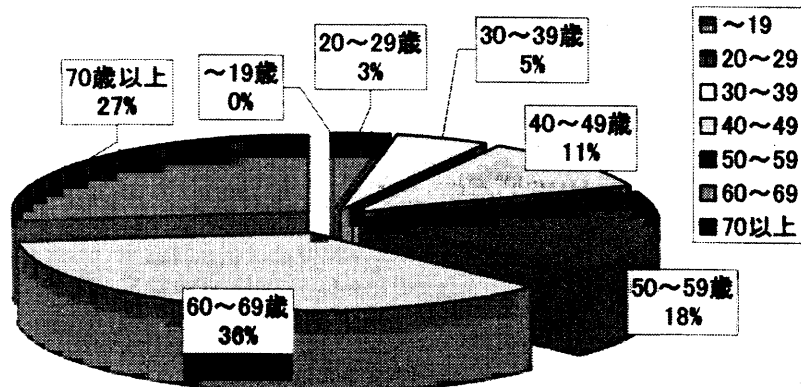


図3 平成15年ひやま漁協江差支所 組合員年齢構成



写真1 漁業研修所での実技講習



写真2 フィンがなくなったことを想定しての訓練

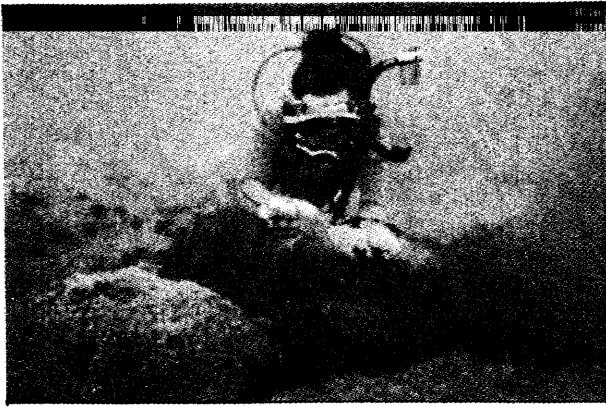


写真3 漁場保全活動 海底清掃

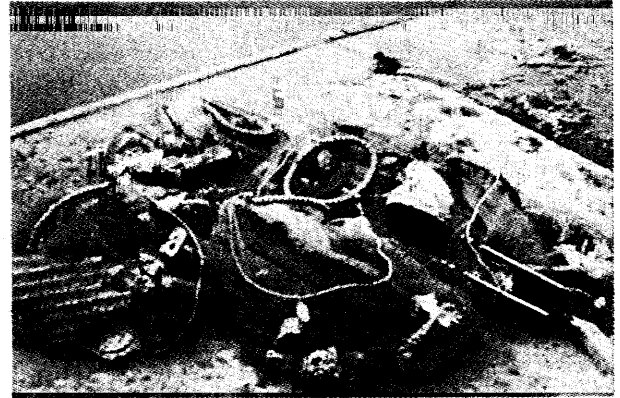


写真4 回収されたゴミ
缶・ビンが多く回収された



写真5 潜水部会と北大学生

図4 平成16年5月11日函館新聞記事

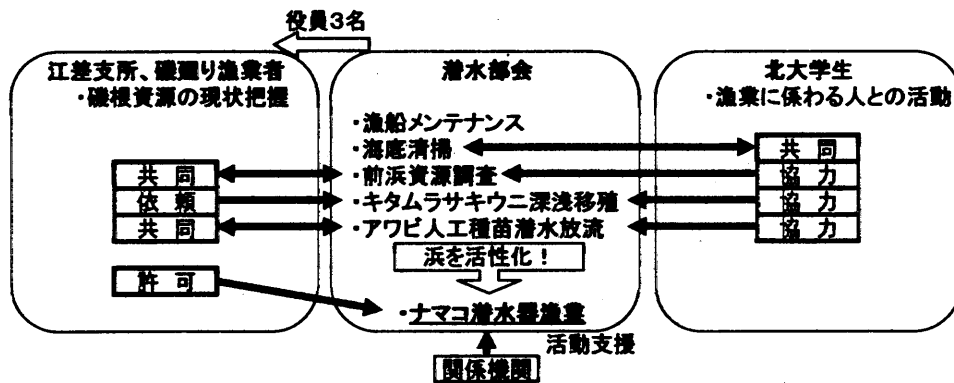


図5 活動内容及び関係団体との関係

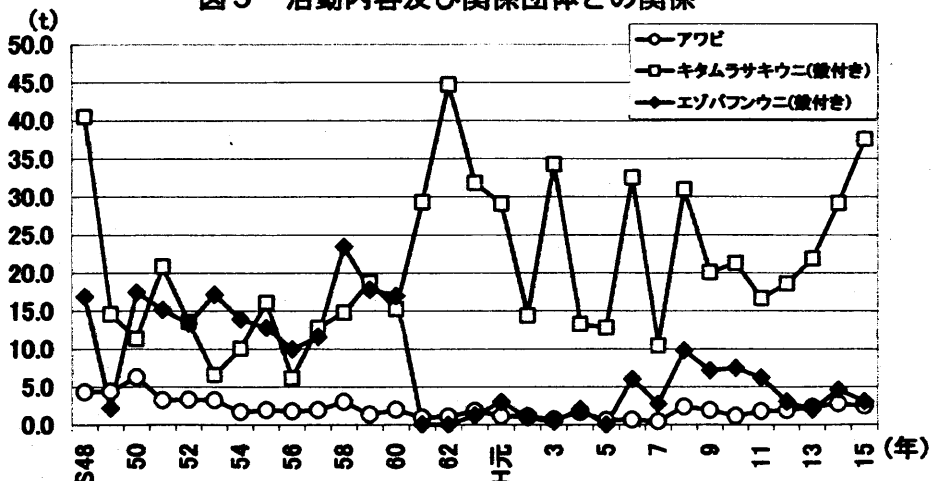


図6 ひやま漁協江差支所 磯廻り漁業漁獲量の推移



写真6 調査前の打合せ



写真7 前浜資源調査潜水作業

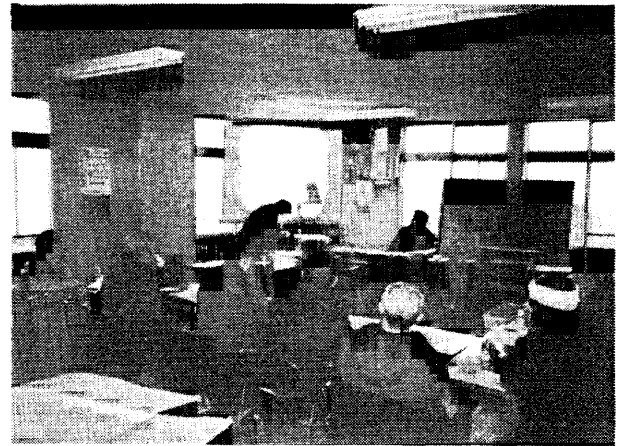


写真8 調査報告会

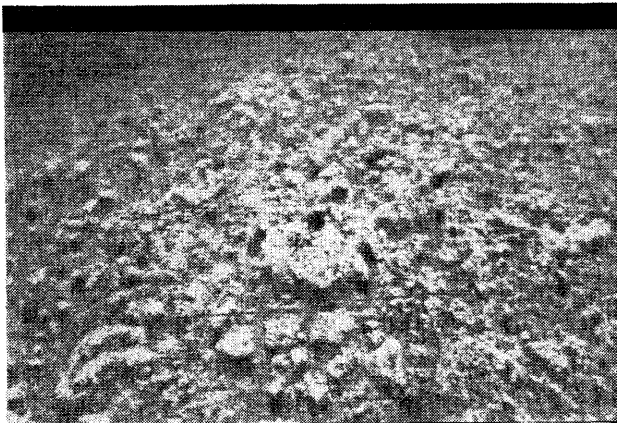


写真9 沖合で未利用になっている
キタムラサキウニ

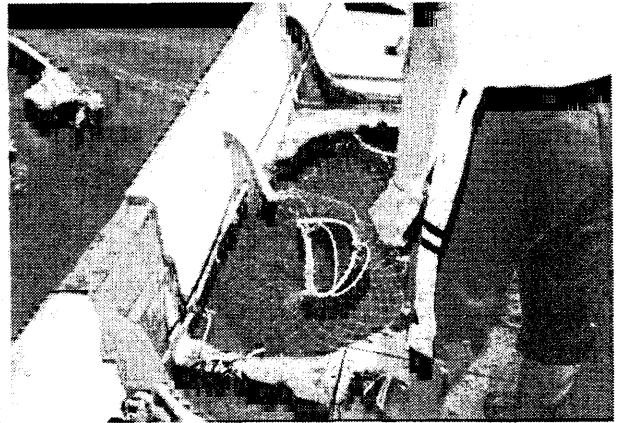


写真10 移殖作業風景

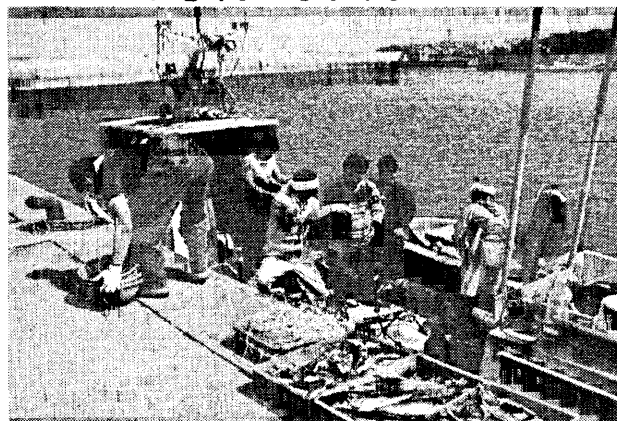


写真11 害敵駆除の準備

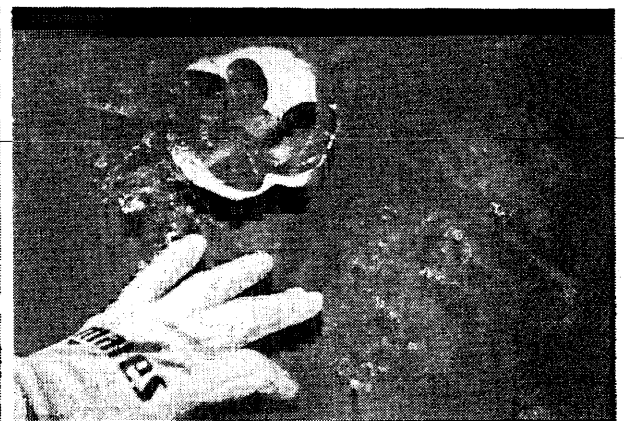


写真12 潜水放流したアワビ

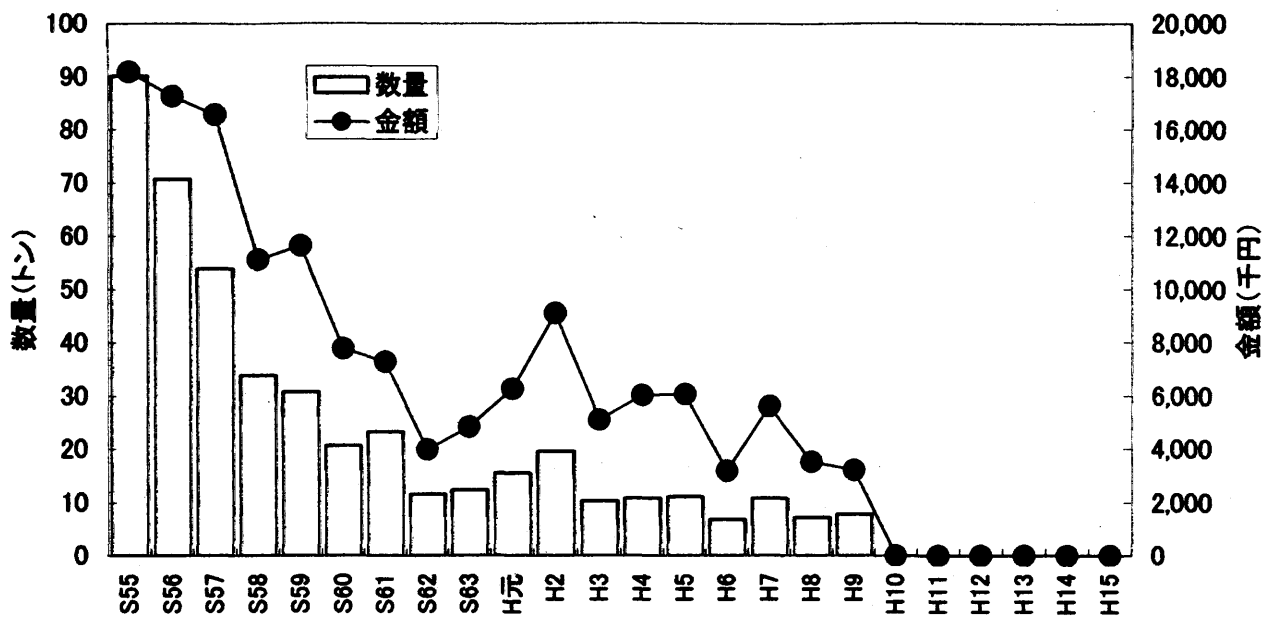


図7 ひやま漁協江差支所 ナマコ漁業生産高の推移

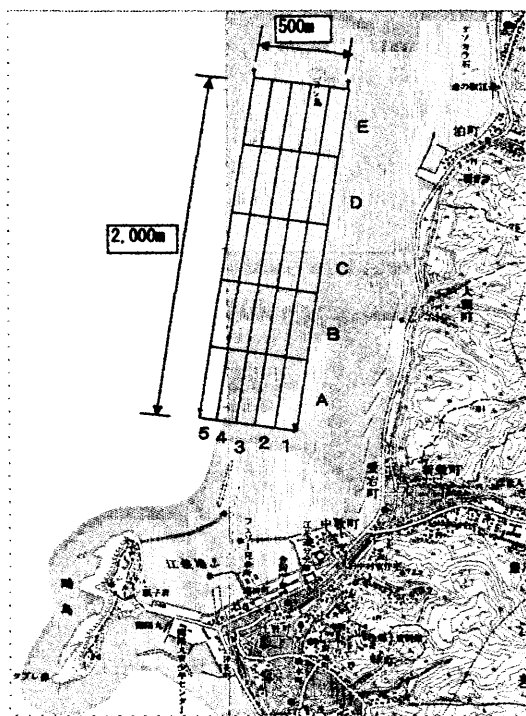


図8 ナマコ資源量調査漁場

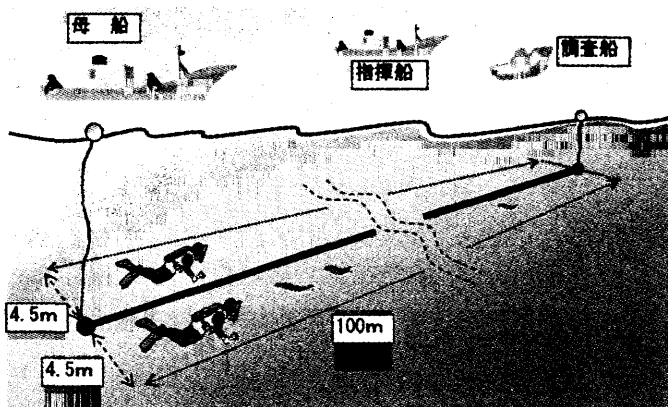


図9 資源量調査の模式図



写真14 採取ナマコ測定風景



写真13 ナマコ資源量調査